

**「大妻女子大学人間生活文化研究所の研究と歴史」
P151～170より抜粋**

『大妻女子大学人間生活文化研究所の研究と歴史』，
大妻女子大学人間生活文化研究所，
2019，
<https://www.ihcs.otsuma.ac.jp/ebook/book.php?id=63>
(参照 2020-06-09)

2. 国際学術研究

2.1. 財団助成金と国際学術研究

日本私立学校振興・共済事業団「学術研究振興資金」 (1999～2001)：東南アジアの社会環境と生活様 式の相互作用

私学振興財団は社会的要請の強い学術研究に対して学術研究振興資金を助成している。配付資金の総額は2019年度は8,000万円(予定)である。

応募には次の2要件を満たす必要がある。①私立大学等(研究所の研究を含む。)に所属する研究者(教職員)が、2人以上で共同して行う研究であること。ただし、研究代表者は、当該私立大学等の専任教職員であること。また、研究代表者以外にもう1名、私立大学等(他法人設置でも可)に所属する研究者(非常勤教職員でも可)がいること。②2019(平成31)年4月1日現在で1年以上の研究実績があること。研究費の継続配付は3年間で上限である。ただし、選考は毎年行われ継続して採択されとは限らない。私立大学1学校につき新規、継続の区分を問わず、1件の応募となり、応募には学校法人の理事長及び学(校)長の「推薦書」が必要である。(以上、事業団ホームページより抜粋)

この研究資金を大澤清二が代表となり、益本教授、高石教授、下田助手らが共同で1999年から3年連続して受託した。大妻女子大としての受託はそれまでに平井信義教授が1年間受けただけであった。研究課題は以下の様である。

■1999年 東南アジア域内の統計を基礎にして少数民族のライフスタイルの変容と健康指標との相互作用に関する計量分析を行った。

■2000年 山地民社会に広がりつつあるHIV/エイズに関する知識/行動に関する研究を行った。

■2001年 前年の調査を受けてさらに薬物乱用に関する実態調査とその対策に関する研究を行った。

トヨタ財団「多元価値社会の創造」研究助成(2005～2007)：東南アジア無文字社会(カレン社会)における伝統的染織技術の図録・映像による保存と技術伝承に関する研究

■代表：下田敦子 研究参加者：綾部真雄 他タイ人3名

■目標：染織技術の記録とその体系化、製布技術の伝承過程の研究、カレン社会における伝統服飾に関する技術伝承の問題の検討

■研究内容：タイ国チェンマイ県、チェンライ県、メーホンソン県のカレン村落における染織技術の保存状態の研究と保存技術者の調査、および伝統技術の伝承者による技術の記録、保存。この研究によって後に染織技術をその要素に細分化し体系化する研究の基礎ができた。

トヨタ財団アジア隣人ネットワークプログラム助成 (2007～2009)：タイ山地民メタ組織“あかつき 広場”ネットワークの構築

■代表：大澤清二、企画協力者：綾部真雄、下田敦子、ソムサック・モレーチャットほか タイ山地民関係NGO代表者ら16名

■目標：山地民の福祉と文化的尊厳を回復するため



の諸NGOを横断した組織を構築することを目指したネットワークを構成する。さらにマイクロファイナンスを設立して、山地民女性が自立するための起業を支援する。

■事業内容：既存の山地民組織、行政組織（山地民博物館、観光スポーツ省、国境警備隊、教育省）大学、研究所、NGO、王室プロジェクト、マスコミを横断する会議、行事を企画。

山地民女性を対象とした零細な起業を支援する小金融組織の設立。

■活動拠点：日本は大妻女子大学人間生活文化研究所、タイはチェンマイ、国立山地民博物館

■活動：連合したNGO団体の協議の結果、毎月、山地民フェスティバルを開催した。特定の団体に所属していない山地民（木）カチン、モン、ミエン、ダーラアン、リス、アカ、ラフ、タイヤイ、ラワ、ムラブリ）の諸民族が自ら栽培、製作した産品をマーケットを開催して販売する、とともに代表者によるワークショップ、シンポジウムを行った。また、新たな工芸品の開発や、作業環境を改善、流通ルートを工夫するための相互の情報交換を行った。この事業は観光スポーツ省や各方面の行政機関に関心を示し、マスコミも報道していた。さらに、マイクロファイナンスを立ち上げて山地民の女性たちが自立して起業できるように支援した。

自由な研究を支援する場としての 人間生活文化研究所

牟田 博光

ミャンマー連邦共和国教育省 政策顧問／
東京工業大学 名誉教授／人間生活文化研究所 特別研究員



前職の大学を定年退職し、国際コンサルタントとして発展途上国の教育開発や評価のお手伝いをしていたが、縁あって、人間生活文化研究所の特別研究員の籍をいただいた。おかげで、少額ながら科研費も頂くことができた。

ミャンマーでは2011年4月から、それまでの軍事政権に代わって、選挙で選ばれたテイン・セイン政権による民主化政策が始まった。テイン・セイン自身が元中將で、諸外国はもちろん、国内でも本当に民主的な政権運営がなされるのか懐疑的な見方が多かった。ところが多くの予想とは異なり、テイン・セイン大統領は次々と民主化政策を打ち出し、実行に移した。経済指標を始め、各種の社会指標は在任5年間で大きく向上した。その成果は2016年度から実質アウン・サン・スーチー国家最高顧問が率いる政権に引き継がれた。

教育改革も大きな課題で、国際的な水準に到達するため、国内外の有識者を組織化して、CESR (Comprehensive Education Sector Review) を3年間実施し、その知見に基づき、2016年度からの5カ年計画であるNESP (National Education Strategic Plan) の原案を作成した。テイン・セイン政権下の教育大臣はミャ・アエ博士で、北海道大学で工学博士号を取得され、マンダレー工科大学の学長も勤められた経歴がある。日本の教育を手本にしたいということで、義務教育である小学校課程の全教科を日本の指導の下で改定するという一大事業を始めた。その他、様々な教育改革の相談に乗る教育省政策顧問職にも日本から人を招きたいという話があるがどうだ、と誘われた。ミャンマーに出張して大臣にお目にかかったが、豪快な性格の方で、お酒も強く、この方のためなら数年間仕事をしてもらいたいと思い、お受けすることにした。

ところが、準備の末、半年後渡緬した時には、大臣は肝臓を悪くされ、病に倒れられて入院していた。昔予防接種をした時、消毒が不十分な注射器を使った事で肝炎にかかり、菌が残っていたのが、激務で体が弱った時に発病したのだという。その後再びお目にかかることなく、亡くなられた。

異国に来てみたら上司がおらず、何をするのかの指示もない。ミャンマーは縦型社会で、同じ組織でも、横の連絡は十分でない。回りの人も、あの人は何をしに来たのだろう、と怪訝な目をしているように見える。昔若い頃インドネシア国家開発計画庁で働いた時にも似たような経験をした。その時には先輩から、「状況を把握し、自分の置かれた立場で、出張期間中に何の寄与が出来るか考えなさい」と言われた。その先輩は後に経済企画庁の局長になった。状況は同じで、特に誰が指示した訳ではないが、大臣は居なくても任務期間中に自分なりに寄与できる事を考える事にした。幸い世話をしてくれる教育研究局に鳴門教育大学で修士号を取った日本最員の課長補佐がいた。データ入手の便宜を図ってもらいながら何の提言が可能かを考えた。

民主政権になったとはいえ、公開されている情報は限られている。しかし、教育省にデータが無い訳はなく、単に公開されていないだけだと分かった。隠している訳ではない。ただ、行政に必要なデータをその時々集め、必要な数字を集計し、いくつかの表を作成したら、それでお仕舞いというだけのことである。そうであれば、出来るだけ生データをもらい、分析して結果を出し、それに基づいて、提言すれば説得力もあり、統計利用の例も示せて、役にも立つのではないかと考えた。

本省レベルでは多くのデータはエクセル表になっている。次第に、どの様なデータであれば入手可能

で、時系列的にさかのぼれるかも分かってきた。何の分析をするかと言うより、何のデータなら入手可能で、入手出来たデータからどのような分析なら可能か、という試行錯誤を繰り返しながら、政策提言に結び付けることができる分析へと収斂することが出来た。5年間で20本の論文形式の報告書を書いた。様々な分析の中で、データから見て、ミャンマー教育の基本的問題が少しずつ見えてきた。

まず学校の規模が小さい。行政区というより、生活している町内会（コミュニティ）単位に学校があり、1学年1学級程度、全校で100人以下の学校が半数を占めている。さらに学校は「昇格」する。学校は基本的には小学校、中学校、高校に大きく分類されるが、例えば中学校は中学校課程のみの学校ではなく、最高の教育課程が中学校課程である学校という。同様に、高校は通常小学校課程、中学校課程も持っている。小学校といっても、5学年が全部揃っていなかったり、揃っていても人数が少ない場合はランチ小学校と「ランチ」という形容詞をつけて呼ばれる。分校というのではなく、「準じる」という意味である。4年制の中学校、2年制の高校でも同じである。また、中学校課程を持つ学校で、小学校とランチ中学校の間に、ポスト小学校と呼ばれる学校もある。こうして、ランチ小学校から始まって、高校まで序列があり、順次昇格する。特に2011年の民主政権誕生以降、地元の要望に応じて学校を昇格させることによって、就学率を向上させ、かつ、選挙民の要望に応える政策が執られることとなり、中学校課程や高校課程を持つ学校の数が地理的に密のまま著しく増えた。

学校が昇格すれば、当然児童生徒の数が増え、それに見合った教室の増設、教員の配置もなされるべきであるが、その手当ては遅れている。教員は教員養成校や教育大学で養成されるが、定員の関係で、その卒業生数は定年で辞める教員の補充程度である。児童生徒が増えなければ、大きな問題は無いのだが、児童生徒が急増する時にはこの仕組みでは対応出来ない。そこで、教員免許のない大卒を臨時教員として大量に雇用し、勤務しながら教員としての訓練をほどこす方法が採られた。

また、居住条件の悪い山間部などの学校に配置された教員は、都市部の学校に転勤願いを出し、順次移動してくるため、山間部は常に教員が不足し、都市部は余るほどにいる。また、子どもは地元の学校

に通うことになってはいるものの、はっきりと定められた学区はなく、学校は基本的にすべて国立のため、学校が受け入れてくれさえすればどこの学校にも行けるため、人気のある学校は敷地のある限り大きくなる。規模が最大の高校は児童生徒数が6,668名（2017年度）と信じられない大きさである。これだけの人数を収容する校舎は当然無いため、2部制を採っている。ミャンマーでは2部制の学校は都会にある有名な大規模学校である。

このように、ミャンマーの教育は全てにおいて自然発生的で、計画性のなさが問題である。就学率を上げ、多くの子どもに教育を与えるという方向性は良いとして、それでは10年後、20年後にどのような姿になっているかという具体的な目標がなく、目標を達成する道筋もはっきりしない。児童生徒が増えたら泥縄で対応するという、後追いの処理になっている。また、効率性の考えもない。例えば、全国平均で教員当たり児童生徒数を計算すると、経済水準に比して国際的に見ても決して悪い数字ではない。ミャンマー国民が教育熱心ということはもちろんあるが、各学校の規模が小さすぎるのが主な要因である。小さな学校でも一定規模の校舎と教員が必要である。学級も固定化され、友人と切磋琢磨する事も少なく、教育効果を考えても問題が多い。

現在のように小規模に乱立している学校を基本として必要な校舎や教員を配置するのではなく、適正規模を考え、必要な統廃合を行い、効率的な学校配置にしていけば、今後の就学率向上に伴う必要な校舎や教員数もかなり抑えられるのではないかと考えられる。地方の行政官がそのような意識と技術を持って、地方教育計画を作る事ができれば、長期的には効率的な教育行政が出来る。自分が地方教育行政官の代わりに全てを計画することなど出来ないが、それが必要だという意識改革を起こすきっかけを作ることは出来るのではないかと期待している。

教育政策顧問として仕事をしている以上、報告書執筆にはそれぞれの締め切りがあり、適時に報告書が出せないと困る。分析が生煮えでも、とりあえず仕事をしたところまでで何がしかの提言が必要になる。ゆっくり腰を据えて、ジャーナルに投稿できる質の高い論文が書けるわけではない。仕事として書いた報告書を、研究論文として体裁を整え、投稿するには一工夫居る。

行政としては、アップデートな即時の議論が必要

である。しかし、例えば、軍事政権から民主政権への移行期に何が起きたか、を詳細に分析する事などは、学問的に価値のある仕事である。現在の仕事が一段落すれば、仕事で書いた報告書をブラッシュアップして、投稿論文の形に仕上げたいと考えている。人間生活文化研究所の特別研究員のポスト、及び頂いた科研費は仕事で書いた報告書や集めた資料を研究論文にするのに役立ち、自由な仕事をサポートしてくれる。このような可能性を与えてくれた事に改めて感謝したい。

SNSを通じて先住民の世界を覗く 一質的研究としてのテキストマイニング

綾部 真雄

首都大学東京大学院人文科学研究科 教授



タイ先住民とともに

タイ北部に住む先住民の研究を始めてから、今年でちょうど30年になる。その間に見聞きした様々な事柄、遭遇した出来事の数々は、人類学者としての私に独自の視点とこの世界で生きていくための覚悟を与えてくれた。現在、曲がりなりにも大学の教員として教鞭をとれているのも、かれらの生き様に垣間見た世界の奥行きと不条理を理解したいという素直な気持ちに負うところが大きい。その意味で、かれらには一点の曇りもなく心から感謝している。

単なる感謝の念をより具体的なかたちにしたいと考えるようになったのは、以前の奉職先から現在の大学へ移った2007年前後のことである。人間生活文化研究所の大澤先生にお誘いいただきトヨタ財団から助成を受けたプロジェクトに参加したこともひとつの契機となり、私はタイの先住民、なかでもリスの人々を巻き込んだ支援プロジェクトをやはりトヨタ財団の力を借りて立ち上げた。まず初めに、麻薬戦争（2003）で被災したリスの子どもたちに文化復興運動を通じて新たな居場所を提供するプロジェクトをリスの村人らと共同で開始し、この流れを汲んだ諸活動は現在に至るまで続いている。2019年1月には、かつての支援村のひとつにタイ政府の認可を受けるかたちでリス文化芸術センターが設立され、これを以て私は自分の役割を全うしたと感じている。今は、より小さな、しかし成果が可視化されやすいことに時間と労力を注ぎたいと考え、リス語の正書法を普及させ、口伝で継承されてきた儀礼句をアーカイブする作業にゆっくりと着手しつつある。

当初は訝しげに私のやることを遠巻きで見ている村人たちも、5年経っても10年経ってもフェイドアウトしない私の存在に次第に慣れ、今ではそれなり

に協力的な姿勢を見せてくれるようになった。なにせ相手にしているのは、かのジェームズ・スコットが『ゾミア』（2009）のなかでアナーキストの代表格として描いたリスである。「それなりに」でも、成功の部類に入る。かくして私は、タイのリスの顔役たちとの間にパイプを持った唯一の日本人となった。

とはいえ、よいことばかりではない。どこに行っても「新たなプロジェクト」の名のもとに寄付要請を受けるほか、なんらかのイベントに出席すると、タイの地方政治家たちと同じ席に通され、こちらを値踏みする無遠慮な視線を撥ねのけながら、聞きたくもない自慢話に相槌を打つ羽目に陥る。饗宴のおこぼれにあずかって豚のスネ肉にかじりつきながら、子どもたちをからかっていた昔が眩しく思い出される。

SNS世界の奥行き

一方で、ちょっと面白がっているのは、リスの人々が次々と立ち上げていく様々なSNSのネットワークに私自身が組み込まれつつあることである。現在、リスに関連したものだけでも、2つのLINEグループ、1つのFacebookグループ、1つのWeChatグループに入っているほか、Facebook上の「世界リス連盟」のオープンアクセスのページを時々覗き、Messengerでリスの人々と頻繁にやりとりをしている。村人たちが、私の持ちこんだデジタルカメラにすら驚愕の眼差しを向けていた20年前とは隔世の感がある。今では、山の子どもたちまでもがスマートホンを持ち、SNS上でありとあらゆる情報の投稿を競い合っている。

私自身はこうしたSNS上での投稿をほとんど行わないし、日々交わされる無数のやりとりについてもきちんとフォローしている訳ではない。行きがかり

上名前を連ねてはみたものの、最初は少し鬱陶しく思っている部分すらあった。あまりに意味のない無秩序な投稿が多いほか、時に非常にグロテスクな画像が無作為に投げ込まれることもあるからである。しかしながら、これらをしばらくの間横目で眺めているうちに、そこにみられる「意味のなさ」や「正直さ」の果てしない連鎖こそが、実は非常に貴重な人類学的情報の鉱脈であることに気が付いた。

人類学者は、全神経を集中して村人の井戸端会議に聞き耳を立て、それを時に「半構造化インタビュー」などと称したりする。要するに、そこに求めようとしているのは「正直さ」、すなわち人々の生活に根差した本音に他ならない。定量的調査を丁寧に実施して大量のデータを集め、その結果をスプレッドシートに落とし込んで見えてこない、人々の感情の振れ幅のようなものにこそ情報としての質を見出そうとするのである。だからこそ長期間のフィールドワークに従事し、現地の言葉に精通し、信頼関係を構築していくなかで、ひたすら人々が無防備な「正直さ」を見せるのを待つ。質的研究は、多大な労力と時間に裏打ちされてこそはじめて豊かな実を結びうるのである。そうしたなかSNS上の種々のやり取りは、わざわざ現地に赴かずとも人々の無防備な本音に触れることのできる貴重なテキスト群であると言ってよい。

ここでは、こうしたSNS上の膨大なやり取りから人類学的に意味のある情報を抽出する作業を「テキストマイニング」として位置付けてみたい。SNSを研究対象とすることもテキストマイニングもそれ自体が特に目新しいわけではないが、そこから得られる情報が質的データとして意味を持つためには、一定の条件をクリアしなければならない。まず、現時点では大半のグループが相対的に新しく、投稿上のマナーや規範が必ずしも定まっていないことに留意したい。だからこそ、共通認識に基づく単なる儀礼的やりとりに至る以前の、「本音」のやりとりを観察できる状態が残っている。すなわち、人類学的には“旬”の状態にある。また、その状態のグループに招待されてすべてのログを読むことが出来るメンバーである必要もある。さらには、それぞれの投稿者の置かれた立場や投稿された内容（およびその文脈）を正確に理解するリテラシーも要求される。加えて、タイ語やリス語を解する能力が必要とされることは言うまでもない（大半の投稿はタイ文字でな

されるが、時にアルファベット化したリス文字も混在する）。そうすると、この条件下でのマイニングを行える能力自体が相応に特殊なものとなる。

テキストマイニング

仮に意味のあるマイニングが行えたとしても、テキスト群を文脈化し、意味のある解釈や分析を行うのは決して容易ではない。そこでここでは、そうしたデータを正式に学術的な媒体に載せる以前の段階としての、ごく予備的なマイニングの結果2件を支障のない範囲で紹介したい。

〈なりすまし事件〉

2018年3月、リスのタイへの到達100周年を記念して大きな国際イベントが開催されることになった。しかし、いくつかの自治体のレベルの小規模な補助金を除けば、目立った財源が無く、すぐに開催自体が危ぶまれるという状態に陥る。そこで、実行委員会の執行部（筆者は顧問を務める）で話し合い、多方面からの寄付を募ると同時に、宝くじを販売してその売り上げを運営費に充てるという方針が決定された。一等がトヨタのピックアップ・トラック、二等が純金のネックレス、三等が最新の 아이폰 といった具合の、なかなか豪華なラインナップである。この際、宝くじ販売促進のための広報に世界リス連盟タイ支部のグループラインの一つが用いられることとなった。

そうしたなか、ある日、次のようなメッセージが投稿された。

「一等のトヨタのピックアップ・トラックの当選番号は自分が既に握っている。もうもらったも同然だ。」

なお、この発言はタイ語ではなく北タイ語でなされており、投稿者は「マサオ」（筆者のファーストネーム）を名乗っている。これを私による悪いジョークと受け止めたのが、旧知のリス男性2名だった。彼らは私の評判が傷つき、また投稿が炎上することを避けるため、あえて茶化したように「@マサオ トヨタ車が日本車だからかい？」「@マサオ おいおい、もう当選番号が決まっているはずないだろう」と返してきた。先のなりすまし投稿が本当に私によるものだと思い込んでいる人々がいることに少なからずショックを受けた私は、すぐさま「@マサオ 私の名前を騙るのはやめてください。私だと勘違いしている人もいます。本当のマサオより」と投稿した。これを受け、先の旧知のリス2名が強い口調

で偽物を脅す内容を投稿し、さらにはリス連盟タイ支部の議長が「非礼な行為はやめましょう。あなた自身の本名を名乗り、公益性のある内容のみを投稿してください」と畳みかけた。その直後、「偽者」はグループから退会し、以降、同様の投稿がなされることはなかった。

単なる愉快犯かもしれないが、解せない点がいくつかある。まず、大半の人々がタイ語もしくはリス語による投稿しか行わないのに対し、この人物はあえて非常に流暢な北タイ語で投稿していることである。おそらくは、タイ語やリス語を使うことで、言葉の使い方により自身を特定されることを嫌ったのだと思われる。また、私の名前を騙る際に、私が普段から用いる名前のタイ語のスペルと全く同じ表記を用いていたのも偶然とは思えない。タイ語で私の名前を書く場合には多くのヴァリエーションが存在するにもかかわらず、私が好んで用いる表記と完全に同じものを用いているのはいささか不自然である。すなわち、私からそう遠くない位置にいる人間による営為である可能性が高い。とはいえ、私にはリス社会に敵がいる自覚もないため、総合的に考えると、私という無難な外部者をスケープゴートにすることで、100周年記念大祭をかき回そうとする政治的意図を反映したものだと考えるのが最も妥当である。

タイのリス社会にはいくつかの派閥があるが、同大祭はそのなかでも相対的に新しいにもかかわらず、現時点で最もプレゼンスの高い派閥を中心に運営されている。その現状を面白く思っていない人々は少なからずおり、そのなかの誰かが軽いジャブを放ってきたのかもしれない。

〈リスの呼称問題〉

リスの人々と接点を持つ一般のタイ人がしばしば犯すミスが、リス (Lisu) を「リーソー (Leesaw)」と呼んでしまうことである。アカの人々を「イーコー」、パカニョー (カレン) の人々を「カリアン」という自称とは異なる蔑称で呼ぶべきではないという知識はかなり浸透してきたが、「リーソー」は原音である「リス」に近いだけに、非リスのタイ人はいくつか無防備に「リーソー」という言葉を連発する。10年ほど前までは、タイ人サイドの無知として看過されてきたが、高等教育を受けるリスが増え、権利意識が高まっている現在にあっては、すぐに叱責を受ける。ごく最近も、あるドキュメンタリー番

組においてリスの伝統的祭祀を紹介する際にテロップに「リーソー」と書いていたケースがあり、それがリスの人々の感情を著しく害することとなった。世界リス連盟タイ支部のある女性は、自らのFacebookページにおいて「リーソーじゃない！私たちはリス！」と激昂していた。

そうしたなか、Facebookにおける世界リス連盟の国際ページに投稿されたある文面が波紋を呼んだ。それはミャンマーのあるカチン女性によるものであり、彼女はカチン語でリスの舞踊好きを揶揄したのみならず、そこでリスの人々をヨーイン (Yawyin) と呼んでいた。ヨーインとはミャンマーにおけるリスの別称であり、特に、リスをカチンのサブ・グループとして扱う際に用いる呼称であるため、ミャンマーのリスの人々は、この言葉を決して主体的には用いない。アウンサンスーチー氏が政治の実権を握って以降、ミャンマー政府による少数民族への締めつけは総じて緩和に向かっており、リスはそこに乗じてカチンからの分離を志向し始めている。この傾向はカチンとリスとの間の緊張を高め、現在、局所的に武力衝突も起こっている。先のカチン女性の発言は、明らかにこうした状況を反映したものであり、意図的にリスを侮蔑する目的での投稿であったと推測される。

これに怒ったミャンマーのあるリス男性は、同カチン女性に英語で「stupid women」(原文ママ)「shame on u」と反応し、タイのあるリス男性もそれに呼応するかたちで「We are Lisu, we are not Yawyin.」と付け加えることを忘れなかった。タイのリスとミャンマーのリスとの国境を越えた本格的な交流が始まったのはここ7、8年のことにすぎない。だが、一連の応酬をみていると、国家を超えた汎リス・アイデンティティが以前よりもさらに強固になりつつあることが窺える。

以上は、リスの様々なSNSグループでやり取りされている膨大なテキスト群のほんの一部である。丹念なマイニングを行えば、現地に直接フィールドワークに赴くのととはまた異なったかたちで、リスの人々が生きる現実を浮き彫りにすることができそうに思える。しばらくの間、その可能性を追求してみたい。

東北タイの純農村から東京三番町へ

佐川 哲也 金沢大学人間社会研究域 教授



私の大妻女子大学への就職は、人生における最大の転身でした。大学院生が大学助手になることは、どこにでもある研究者のストーリーです。しかし、私の生活変化は実に劇的なものでした。それはタイトルにあるように、まさに地球上の最も田舎から最も発展した大都市の、しかもど真ん中で暮らし始めるというものであり、原住民が大都市で働き始めるようなものでした。

もう28年も前のことです。現地で撮りためた写真のチカラをかりて、過去の彼方に沈んでいた記憶を少しずつ浮かび上がらせて、当時のことを振り返ってみたいと思います。

私は、筑波大学大学院体育科学研究科の学生でした。大学院のサークル活動として東南アジアの保健統計を研究する活動に参加していました。私自身の専門はスポーツ社会学でしたが、大澤教授とは不思議な縁があって、いろいろな研究活動のお手伝いをさせていただいておりました。1984年の3月に、初めてタイ調査に参加した時の記憶はかなり鮮明に残っています。あれ以来、アジアでの調査を続けており、私の研究者生活はアジアでの調査抜きでは説明できません。筑波大学に端を発したアジア研究では、業績面では大澤教授の足下にも及びませんが、渡航経験と滞在日数ではかなり頑張っているかもしれません。

私は、平成2（1990）年6月から、東北タイで子どもの遊び調査をするために、タイ国のシーナカリンピロート大学から学生ビザを得てタイ国に留学をしておりました。その時の指導教員であったスッティ・パニチャロンナム先生には、大変お世話になりました。朝に晩に日本語でいろいろな議論をしたことを思い出します。日本語の堪能な方のお家で過ごさせていただいたおかげでも何不自由なく留学生

活を送ることができましたが、今にして思うと、タイ語能力を向上させるために別の環境に身を置くべきだったとも感じています。現在は、奥様のスカンヤー先生と、バンコク市内の静かな環境でお元気に隠退生活をされております。

滞在した9か月の間は、ひと月の半分をバンコクで暮らし、半分を調査地であるウボンラーチャターニ県で過ごしました。特に調査地の一つとして頻繁に通ったノーンガンホイ村は、戸数が200戸ほどの小さな純農村でした。住民のほとんどが農民であり、お寺に暮らす僧侶以外が田畑を持っており、農業を生業とする村です。その村はバスの大通りから数キロあまり舗装されていない道を入ったところにあり、どこまでも続く東北タイの大平原にある集落の一つです。もちろん全方位どこを向いても、雨水に頼る痩せた小規模な田んぼが広がっていました。

この村に滞在するときは、ノーンガンホイ村小学校のペット（ダイヤモンドという意味）校長先生の家に部屋を借りて住んでおりました。ペット先生は、この村に学校が建てられた時から村内の土地を得て住むようになり、この村の住民のひとりとして、村の子どもの教育を預かる教員として、村人から厚い信頼と尊敬を得ておられました。

私の村での生活は、夜が白み始める頃に起き出し、村の様子を観察して回る毎日でした。熱帯に位置するタイでも乾季の始まる12月頃は朝晩が涼しく、長袖が必要な感じです。どの家でも外でたき火をしてお湯を沸かし、その蒸気で餅米を蒸しています。子どもたちもその火を囲んで暖をとったり、お手伝いで料理を作ったりと一日をスタートさせています。元気な男の子たちは兄弟同士で、あるいは近所の友達と早速遊んでいます。家畜の牛や水牛を畑に連れて行く子がいれば、畑から野菜を手に戻ってく

る子もいます。箒を持って家を掃いている女の子や弟妹の世話をしている子もいます。学校の方へ歩いてくと、朝ご飯を食べる前からもう学校に来ている子たちもいるようで、校庭の隅っこに集まってビー玉を転がしている様子を見ることもありました。

午前7時を過ぎる頃になると、次第に学校が賑やかになってきます。私も朝食を済ませ、子どもたちを校内で観察していると、玄関先に置かれた仏像の前で立ち止まり、礼儀正しく手を合わせて子どもたちが登校してきます。鞆を教室においた子どもたちが校庭を走り回っています。男の子たちはスリッパを脱ぎ捨て、裸足でボールを追いかけています。雨季で水たまりができていようが、グラウンドで牛が草を食べていようが、そんなことはお構いなしに元気に走り回っています。女の子たちといえば、ゴム跳びやお手玉に夢中で、順番を守りながらも我先にと巧みな技を繰り広げています。その周りを低学年の子どもたちが取り囲み、憧れの眼でじっと見つめています。最初の頃は、カメラやビデオを取りだして撮影を始めると、遊びをやめてレンズをのぞき込まれて、せっかくのタイミングを逃してばかりでし



村での食事（右から2人目がペット先生）



朝礼の風景

た。それでも次第に観察者の存在に慣れ、私が「続けて」と頼めば、気にせずに遊びを続けてくれるようになっていきました。

午前8時に鐘が鳴らされ、校庭に整列して朝礼が始まります。国歌を歌って国旗を掲揚し、仏様を讃える誓いの言葉を述べ、上級生の朝礼係や先生から朝の言葉を聞いた後、列を作って教室に入り、朝の授業が始まります。朝礼が始まる頃になると、遠方の街から通ってくる先生たちも皆登校して、さっきまでの賑やかな運動広場が学舎へと変わっていきます。

私は職員控え室に移動して、観察ノートを書いたり、時には教室に赴いて観察したりしながら、タイの田舎の学校生活を送りました。たまに先生が不在の教室があると、子どもたちに日本語などを教えたりすることもありました。

村の学校では、子どもたちは自宅に戻って昼ご飯を食べます。遠方から来る子どもたちだけが、兄弟や友達で輪になって弁当を食べていました。小型のカテップという弁当箱に手を突っ込み、餅米を丸めては、ほんの僅かの玉子、カエルやトリの唐揚げ、ソムタムというパパイヤサラダをおかずにして食べていました。先生たちは、街で買ってきた総菜と学校で手早く作ったおかずを並べて、宿舎の居間にゴザを敷いて車座になったり、教室で机を並べて食べたりと昼の時間を過ごします。先生たちが残した食事は、子どもたちがきれいに食べ尽くし、後片付けの手伝いをしてくれます。貧しい家の子どもたちのケアをこんな形でしているのだなと理解していました。

昼休みが終わる頃になると、戻ってきた子どもたちで校庭が賑やかになっています。田舎の学校では、午前中は教室で勉強し、午後からは外でする授業が多かったように記憶しています。体育授業があれば、先生とともに校庭の花壇の整備や校舎の修復などをすることもありました。確か毎週木曜日の午後は、ボーイスカウトの時間であり、高学年生たちはスカウト服を着て登校し、隊列を組んで訓練をしていました。

タイの学校には園児の部屋もあり、午後はお昼寝をして過ごし、家が近い子どもたちは少し早く帰宅します。小学校は皆午後4時が帰宅時刻であり、およそ3時半頃になると授業が終了して、学校全体ががやがや、そわそわしてきます。鐘が鳴って校庭に整列して国旗を降ろすと、列を作って校門を出ていきます。

11～12月の乾季には対抗スポーツ大会が開催されることから、選手たちは学校に残り、サッカーやバ

レー、タクローの練習をしてから下校します。若手の先生たちがコーチ役を務めて練習に勤めます。ひとしきり練習をしたら、バラバラと家路に向かいます。

田舎の子どもたちは、たくさんの家事を引き受けていることもあり、家族の一員としての役割を果たしています。日が暮れる頃には、朝連れて出た家畜を連れ帰ったり、お使いや夕食の手伝いをしたり、賑やかだった一日が日暮れとともに静まりかえっていきます。

雨季の稲が大きく伸びる頃には、夜ヘッドライトをつけて、カエル取りに出掛ける子どもたちもいます。日本のウナギ釣りのように、菜箸ほどの竹先に釣り針の付いた短い糸を結びつけ、釣り針にはミミズをつけて田んぼの畦に突き立てておいて、カエルを釣るのです。夜にヘッドランプを付けて田んぼを回り、カエルを回収していくのも、子どもたちのお手伝いです。翌日街からカエルを買いにやって来た業者に売り渡せば、ちょっとした小遣い稼ぎになるというわけです。

私は、タイの伝統遊びが変容していく様を観察し



子ども達と記念撮影



セパタクローをする中学生

ながら、東北タイの純農村で田舎暮らしをしていました。村に入るときには「お帰り」、村を出るときには「いつ帰ってくるの」と声をかけられる日々を重ねていました。そんな私が、千代田区三番町に就職したわけです。ワイシャツにネクタイを締めて満員電車でゆられることになった若者の生活の変化が、どれだけ大きかったかは想像していただけるとおりです。もう10年以上も東北タイの村を訪れることが出来ないでいます。もう、「お帰り」と挨拶してくれる人も随分減っているかもしれません。

平成3（1991）年2月に帰国した私は、筑波大学大学院博士課程の退学手続きを行い、7年に及んだ筑波での生活に区切りをつけて、東京都内の江東区森下にアパートを借りて引っ越しました。東京下町での暮らしは、東北タイ帰りの私にとって新鮮なものでした。都営新宿線を利用しての30分ほどの通勤は、それほど大きな混雑はなく快適なものだったように記憶しています。三番町から森下までは徒歩でも帰れる距離でしたから、早く仕事を終えた夕方には、違う道を選びながら都心生活を楽しむように帰宅しました。それでも、熱帯での楽な夏着の生活からネクタイを締めての電車と女子大での助手生活は大きな生活変化でした。

特に、時間感覚の変化はタイ農村とはまったく異なるものでした。タイ農村を歩いている時に、時間について考えたことがありました。日本は時間に追いかけているけれど、タイでは時間が経つのを待っているかのようだと。どうして日本人は、時間に急かされて暮らしてしまうのだろうか。一方で、まるで止まっているか、あるいは、なかなか追いついてこないと感じる農村の時間もまた、なかなか耐えがたいものかもしれない。そして、日本人である自分は、きっと気忙しい日本へ帰って行くのだろうと。

あれから30年近くの時間があっという間に過ぎ去ってしまいました。それは日本で過ごした時間だったから早く感じられたのかもしれません。そして残念なことに、現在の金沢大学での時間は、大妻女子大学で過ごした助手時代の時間よりも、さらに気忙しいものになっているようにも感じます。だからこそ、またアジアへ出かけたい、いや、帰りたいと思ってしまうのでしょうか。



海外での子どもの健康実態調査と学校保健活動

國土 将平

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教授

1986年、大妻女子大学副学長でもあり、人間生活文化研究所所長でもある大澤清二先生がまだ筑波大学に在籍していた時、私は、まだ博士課程の1年生であった。毎週月曜日、大澤先生は自主的な勉強会を開催していたが、私はアルバイトを行っていたため、その勉強会に参加する機会は殆どなかった。しかし、12月、大澤先生は私に気軽に「タイに行かないか？」と声をかけて頂き、何にも分からず（よく考えないで）、同行したのが海外調査人生の始まりであった。

まもなく大澤先生は大妻女子大学人間生活科学研究所に移動され、大妻に移動された後でもお声かけ頂き、タイの調査を継続して実施していった。私はまだ大学院生であったにもかかわらず、我々院生がどのようなテーマで研究が可能かを考えさせていただける機会も作って頂いた。徐々に自分の研究としての自覚が得られるようになり、タイでの調査にのめり込むようになってきた。私が博士の学位を取った1992年は、教養部改革が真っ盛りであり、大学教員の公募がほとんど出ない時期でもあった。その時に、大澤先生よりお声かけ頂き、研究所の研究員を3年間させて頂いた。

「東北タイ児童生徒の健康実態学術調査」と謳った海外研究調査のテーマは、東北タイのウボン県における子どもの体の発育や運動能力の発達、健康的生活習慣、遊び習慣や文化を明らかにすることが主要な目的であった。東北地方はタイ国内でも最も貧しい地域であり、初めてウボン駅からホテルに向かうタクシーは、室内から地面が見え、途中でギアがシフトアップできず、信じられないほどボロボロの自動車であった。シーナカリンビロード大学のスッティ先生、スカンヤ先生といった日本語の堪能な先生のお力を拝借しながら、ウボンの調査フィールド

では地方教育事務所のカタシン先生やシティフォン先生などの協力で、毎年1回若しくは2回の海外渡航、また、そこで得られたデータを管理、解析するなどし、自分の研究活動の一部として定着していった。特に発育調査では、「Comparative study on the growth of Thai and Japanese children」の本も発刊することができた。1990年代後半から急激な経済の発展とともに、ウボンでも急激に都市化が進んでいった。このような発展に伴い、2010年の発育調査では、タイ国の田舎でも日本でみられているような発育促進現象が観察できたことは研究者としての喜びでもある。調査旅行では、毎回ユニークなエピソードも生まれ、世界三大スープのひとつトムヤム・クンのあまりの辛さのために立てなくなった先生や、夜行列車の移動中にあまりの寒さのためにパジャマのズボンまで上着として着てしまった先生、また寝台列車のシャワーに挑戦された先生、「パパイヤ」と「にんじん」を間違えた先生（調査に同行した方は誰かすぐに分かると思うが）などなど、いくら挙げても挙げきれないほど思い出が詰まったものである。

そのような中で、大澤先生はタイ国北部に居住する山岳少数民族の研究に興味を持つようになっていった。1993年頃より、チェンマイ県を中心に山岳少数民族であるカレン族、モン族、リス族、アカ族、ラフ族の発育データの収集を始め、これ以降、ウボン県とチェンマイ県の両方を訪れるようになった。同じタイ国であっても、文化や習慣、言葉が違う北部は刺激的であり、また、同じ国に住みながら少数民族が独自の言語を持つことに驚きさえ覚えた。北部の調査では、ガイド役で元校長先生のマニットさん、ドライバー兼護衛役のスリウォンさん、綾部真雄先生（首都大学東京）の堪能なタイ語とリス

語の助けを受けながら、2005年まで、およそ10年間、数千人の少数民族の発育データを収集することができた。夜遅くまでウィスキーを飲みながら、研究のディスカッションや四方山話に花を咲かせながらも、翌朝には全員シャキッと調査に出発するという日々であったように思う。橋が壊れていたり、ぬかるみを滑りながら走行したり、トラックのつけた50cm以上の轍のある道をジープで移動したりしたのは、まさに「川口探検隊」のようだった。

このような研究を継続している中、追い風が吹いてきた。大澤先生を研究代表者として、2003年には文部省国際教育協力拠点システム構築事業（学校保健領域）の指定を受け、さらに、2006年には基盤研究（A）「東南アジア諸民族児童の発育発達（標準値作製を含む）と生育環境の相互作用」の採択により、学校保健活動を包括的に実施可能となることに加え、活動の範囲が、ミャンマーやネパールにまで発展することになっていった。初期の調査では、学校にトイレを借りに行き、見学をさせて頂いたり、道端で寄附を募っていた学校に寄附をしたりして、学校視察させて頂いたり、グラスルーツのフィールドワークもあり、その実態やデモンストレーション学校との乖離を確認することができた。学校保健の活動は、20年間の調査経験を踏まえて、発展途上国に必要な学校保健の6つのモジュール、すなわち、保健委員会の制定、QCを活用した健康的生活習慣づくり、保健室の活用と健康診断、学校環境衛生の充実、危険地図を含む学校安全、学校での野菜育成や家畜の飼育、をつくり、「発展途上国における学校保健マニュアル」の作成、講習会の開催、学校での実施までの体制を構築していった。ミャンマーでの成功は、教育省計画訓練局ウ・ボーイン局長との面会にあったように思う。30分ぐらいの面会と聞いていたが、ウ・ボーイン先生は我々の活動に興味を持っていただき、具体的な活動内容の説明を求められた。我々の2時間を超える説明を聞き、学校保健活動は教育の質の改善に役立つと思っていたらしい。これ以降、1年間に2回のペースで教員養成大学を中心にその講習会や研修会を開催し、教員養成学校の先生に近くの学校で学校保健活動を実施していただいた。また、ミャンマーでは外国人が学校を訪問することは禁止されているので、発育データは教員養成大学の先生方に計測をお願いした。中には怪しいデータもあったが……、発育測

定した子どもはおよそ1万人になり、発育標準値の作成に活用させて頂いた。これらの成果により、国際教育協力拠点イニシアチブ事業で、3回連続のS評価をうけた。上記マニュアルは、日本語、英語、タイ語、ミャンマー語、ネパール語に翻訳され、私は今も活用させて頂いている。

これらの活動は大澤先生を中心として、故高橋徹三先生、家田重晴先生（中京大学）、西嶋尚彦先生（筑波大学）、軽部光男先生（高校数学教師、鈴木和弘先生（山形大学）、佐川哲也先生（元研究所助手、金沢大学）、笠井直美先生（元研究所助手、新潟大学）、小磯透先生（中京大学）、下田敦子先生（大妻女子大学）、中野貴博先生（名古屋学院大学）、鈴木宏哉先生（順天堂大学）、高橋信二先生（東北学院大学）などの方々が調査・活動に参加された。海外調査は2010年まで第39次調査まで数えてきたが、ここまで回数を数えたのは私だけではないだろうか。これから先は活動が多様になってきたこと、参加された先生方の専門性が徐々に発揮され、活動も研究者独自のものとなりつつある。私自身2010年以降、25回を超える調査を実施した。

2011年、私はJICAの短期専門家としてネパールの学校保健法制に携わる事となった。ネパールでは多くの国際機関やNGOが学校保健活動を実施していたが、実効性、持続性が無いために、法律の整備が必要であるとの考えのもと、大澤先生の後押しもあり、私が赴くこととなった。学校保健活動の一つひとつに国際機関の専門家のサポートがあり、それに従って国は政策を決定しているが、その内容は「Minimum Package」というMaximum（膨大）な学校保健活動が含まれており、学校の人材や資産では実施不可能な内容であった。また、物資の支援に偏っており、その物資の供給資金が枯渇するとその活動は自然消滅してしまうものであった。私は、長年の活動で培った6つの学校保健モジュールがいかに合理的であり、洗練されたものであるか、これらの対比の中で思い知らされた。ここで、友川幸先生（信州大学）と一緒に仕事をさせて頂く機会を得て、現在のネパールとラオスにおける研究活動につながるようになった。

現在、ラオスとネパールにおいて、子どもクラブを活用した学校保健活動のプロジェクトを展開している。これは、これまでの学校保健活動の海外展開において、持続的発展をどの様に確保するかを考え

た上での一つの解決策の模索である。その際のキーファクターとして、ソーシャルキャピタルを考えた。すなわちその社会にどのような制度的、非制度的な人間関係があるかを考慮しつつ、子どもクラブという社会的な集団の活動とその活動に関与する先生、保護者あるいは学校での教育委員会や、地域の人々の関係性を構築することにより、子ども達の自発的な学校保健活動の展開、行動の変容を誘発し、それが周囲に波及してゆくことをねらっている。現在、子ども達の自主的な活動が構築できつつある。その一方で、ネパールでは計画を立てる、スケジュールを立てるのが苦手であること、ラオスでは、先生と子どもの関係が非常に厳格であることなど、実施上の困難性にも直面している。

今日の活動は大学院1年生から始まった海外調査に端を発し、大澤先生と30年以上の関係のなかで、構築していったものである。大妻女子大学の「人間文化研究」や神戸大学の「人間発達環境学」といった両概念は私の研究者としての文脈の中で重要な役割を果たしつつゆくだろう。



国際教育協力拠点事業での経験と研究への道標

中野 貴博

名古屋学院大学スポーツ健康学部 准教授

はじめに

私が大妻女子大学の人間生活科学研究所に頻繁に足を運ばせていただくようになったのは2005年からのことです。大学院生時代の2003年頃から現在の所長の大澤清二教授の海外調査に同行させていただく機会をいただき、なんとなくではありますが、研究所の活動やメンバーなどについてお話を伺っていました。大澤教授はお話がたいへん上手な先生で、とても面白く興味深く聞いていたのを良く覚えています。また、お話を伺った場所の多くが、タイやミャンマーといった異国の地であったこともあり、少々の興奮状態の中で聞いていたことをとても懐かしく思っております。そのようなご縁もあり、2005年からは定期的に大澤教授の研究のお手伝いを週に1回程度ですがさせていただく機会をいただくようになりました。少し前まで大学院生をしていた自分には、非常に多くの研究者の方々や、時には行政機関の方、そして、何人もの助手の先生やお手伝いの学生さんが出入りする研究室は、非常に刺激的で日々、多くの情報を吸収させていただくすばらしい時間でした。

中でも私が最も興味を抱き、そして、実際に多くの関与の機会をいただいたのは、文部科学省の国際教育協力拠点事業（学校保健分野）でした。それまでに長年に渡る東南アジアでの調査経験をお持ちだった大澤教授のグループが文部科学省よりの助成を獲得し、学校保健分野の国際教育協力を国の代表として展開するものであり、非常に大きく、そしてインパクトのある研究でありました。また、単に知名度的なものばかりでなく、実効力のある内容であり、現地の学校等においても極めて有効と思われるすばらしい内容であったと今も思っています。この拠点事業以外にも多くの勉強をさせていただきましたが、何と言っても私には拠点事業の活動が印象強

く、その後の私自身の研究活動にも大きな影響をおよぼしているため、以降はこの点を中心に思い出話を書かせて頂きたいと思います。

初めてのミャンマー進出

国際教育協力拠点事業（学校保健分野）の中心フィールドはミャンマーとタイでした。タイは元々長く調査を継続している地であり、人脈もあり、また文化的な理解や国民性も良く理解しているため、これまでの研究の延長線上として、様々な活動を展開、実践していけることに不安はあまり無いのだなと感じました。しかしながら、もう一つのミャンマーは全く違いました。メンバーの1人、金沢大学の佐川教授の留学生タンナイン氏が、ミャンマー政府の文部科学省の役人であったことから、この人脈を手掛かりに少しずつフィールドを開拓していくことになりました。当時、30歳そこそこの私には、正直、わからないことだらけで状況を理解するのに精一杯でした。特に、最初にミャンマーを訪れた時の衝撃は今でも忘れられません。夜便で真っ暗闇のヤンゴン国際空港に到着すると、空港職員と思われる男達が我々の大きな荷物を担いで滑走路を歩いて移動しています。その横を私達も歩いて出口に向かいます。さらに、空港内をバスが走ったかと思えば、それは、昔の青白の都バスでした。ワンマンの文字が窓に書かれていて、なんだかタイムトリップした感じでした。空港の入国審査もアナログな作業が暗闇の中で進んでいき、最後に空港を出ると、チップ目当ての大勢のポーター達が先を急いで、我々、旅行者の荷物を運ぼうとします。正直、恐怖を覚えたのをよく覚えています。

しかし、そんなミャンマーでの活動も急速に進展していきました。大澤教授のすばらしい交渉力もあって、最初は学校に立ち入ることすら出来なかったミヤ

ンマーでの活動が、最後には大臣や局長レベルの人達のお墨付きの活動になり、多くの実践的で有効な活動へと発展していきました。交渉や活動の過程で様々な所へ足を運び、多くのトラブルもありました。原因不明の高熱に襲われたこともありました。一方で、素晴らしい原風景に出会ったり、現地の純粋な子ども達に出会うという経験も多くさせて頂きました。しかし、そんな中でも常に研究魂を忘れずに活動をする先輩先生達に多くの感銘を受け、大学人として生きていくためには、人や社会の役に立つ研究を常に追い求めて行かなければならないと異国の地で思ったことを良く覚えています。百聞は一見にしかず、大学院時代に多くのことを学ばせて頂いたと思っていましたが、まだまだ、経験不足であった自分にとって、一生の財産となる多くの経験や体験をする機会を与えて頂いたことに感謝の思いが今も絶えません。

計測、調査、講習会

国際教育協力拠点事業（学校保健分野）の活動は非常に実践的である一方で、データの収集をととても大切にする活動でした。この点は、現在の私の研究活動においても引き継がせて頂いています。タイはもちろんですが、ミャンマーでも徐々に学校で実際の活動ができるようになると、最初に行ったのは发育(形態)計測とあわせて、生活習慣や教育、多くの文化的社会的な内容を含んだアンケート調査でした。同時に、現地の学校へも繰り返し足を運び、現地が抱えている問題を現場で議論していきました。データが我々に教えてくれる問題意識は、いつでも実に的確で嘘がありませんでした。さらには、実際に学校などに足を運んで得た情報と体験から導き出される課題は、非常に適切であり、その後の活動の成功につながったと思っています。多くのデータやフィールド調査に裏付けられた知見から、現地で保健省や教育省、時には教育大学の学生相手にメンバー総出で講習会を開催することもありました。海外で現地の人達を相手に講習会をすること自体、私には貴重な経験であり、身の引き締まる思いでした。そして、話がどんどん進展していくにつれて、役割の重大さ、研究成果や活動成果の持つ影響力の大きさに身震いしました。活動開始当初は、日本を出発する前に予定していたことが何も出来ないで帰ってこざるを得なかったり、時には、「何も出来ない可能性がある（許可が得られない）ので来ないでください。」などと出発直前にカウンター

パートから連絡が入ったりしていたことを考えると、大澤教授を始めとする先輩先生方の交渉力と研究活動への熱意、信じられないような成果にただただ感銘をうけるばかりです。そして、何より少しでもそこに関われたことを今でも誇りに思っています。

国際教育協力拠点事業を糧に

大澤教授との縁で、人間生活科学研究所に出入りさせてもらうようになり、そして、国際教育協力拠点事業というすばらしい研究事業に携わらせていただき、大変多くのことを学ばせていただきました。その後、大澤教授が副学長にご就任された頃から、ご多忙のため残念ながら海外調査にご一緒するような機会は減ってしまいました。しかしながら、その時のメンバーである金沢大学の佐川教授や、神戸大学の國土教授らとともに現在では、フィールドをタイ、ミャンマーからネパール、ラオス、そして最近ではスリランカへと広げ、調査・実践活動に関わらせていただいています。こちらの活動でも、学校保健領域を主なターゲットとして、以前同様の发育計測や、子ども達の生活習慣等に関わる社会調査、さらには、学校現場と協同しての学校保健改善活動の介入研究など多岐に渡って活動しています。フィールドとなる国々が増えてきたことでデータとしては国際比較が可能なデータも徐々にではありますが揃ってきています。しかしながら、子ども達に関するデータにおいては、国際比較が非常に難しいことを近年痛感しています。文化や教育などの背景が違う国々で国際比較をすること自体、ナンセンスなのかもしれません。一つ間違えば、日本の価値観を押しつけるような考察になってしまう恐れがあることも感じています。当時、現地の学校を多く回らせていた時にも感じたように、現地の問題意識や現地のニーズにあわせた取組や提案を創造していかなければいけないことを改めて感じています。データに裏付けされた問題の抽出に始まり、それを解決するための思考法の提供、一見漠然としていて、ターゲットが不明瞭のような協力の仕方が、実は長い時間たって実になるのだと感じています。そして、何よりも次世代の子ども達にとってプラスになる活動や研究を行っているという充実感、私自身の研究活動において何にも代えがたい物となっています。これからも、諸先輩先生方のご指導をいただきながら、これまでの経験を糧として、多くの研究活動に従事していきたいと思っています。